



地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携モデル構築に関する研究

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター・感染症内科）

研究協力者：末盛浩一郎（愛媛大学医学部附属病院感染症内科）

山之内 純（愛媛大学医学部附属病院感染症内科）

村上 雄一（愛媛大学医学部附属病院感染症内科）

井門 敬子（愛媛大学医学部附属病院薬剤部）

木村 博史（愛媛大学医学部附属病院薬剤部）

乗松 真大（愛媛大学医学部附属病院薬剤部）

武田 玲子（愛媛大学医学部附属病院看護部）

古川 泰弘（愛媛大学医学部附属病院医療福祉支援センター）

小野 恵子（愛媛大学医学部附属病院医療福祉支援センター）

若松 綾（愛媛大学医学部附属病院医療福祉支援センター）

中尾 綾（愛媛大学医学部附属病院感染症内科）

研究要旨

地方における病院と福祉療養施設間の HIV 診療の充実および連携について検討する目的で、急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。今年度はさらに研究の継続として、具体的に療養型病院および福祉施設にて出張講義を行い HIV 診療や介護の意識改善・啓蒙に実践的に努めた。また、講義の際のアンケート調査等を通じ地方の HIV 診療に関する連携の実態を把握し検討した。高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および調査にて、87%が施設として受け入れ可能との結果を得た。さらに、出張講義においても回答者の 72%が HIV 感染を恐れない、83%が受け入れ可能の意見があり、良好な結果を得、昨年に続き今年も実際に自活不能な症例の HIV 感染者の福祉連携が円滑に行い得た。また、本研究を通じ地方における HIV 診療および福祉連携の実態および問題点が詳細に把握できた。

研究目的

高齢化社会を迎えつつある地域において、HIV 診療に関する福祉連携のあり方の研究を行い、診療の充実を図ることを目的とした。さらにその急性期病院から福祉施設までの連携を行う際の具体的事項や方策、提案を纏め上げ全国に発信し HIV 診療や福祉連携に関して、1つの地方のモデルとしての役割を担うことを目的とした。

研究方法

急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。具体的には急性期病院の整備、高齢者施設対象の研修会、さらに療養病院および福祉施設にて出張研修を通じて HIV 診療や介護の意識改善・啓蒙に努めた。また、県内外のアンケート調査等を通じ地方の HIV 診療に関する連携の実態を把握し問題点を検討した。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにした。

研究結果

【1】愛媛県の高齢者施設における HIV 感染症等に関する研修会の開催および実態調査

平成 30 年 1 月 31 日に愛媛県立美術館講堂において、県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者を集まってもらい、HIV 感染症等に関する研修会を開催した。その結果 87 名の参加者が得られ、HIV 感染症を中心に初心者にも判りやすく講演を行った（講演者：高田清式、他）。今回、愛媛県には高齢の HIV 感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられる HIV 関連認知機能障害（HAND）についても昨年同様継続して話

題提供をした。参加者からは「HIV についてよく理解できた」「HIV 感染者やエイズ患者の数や増加に驚いた」の感想とともに、「エイズ患者増加に伴い介護に関しては、必要であり、より具体的に考えるべきと実感した」、「あまり感染に恐れる必要はないし、施設責任者とも十分に話し合いたい」などと比較的前向きな意見があり、HIV の知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことが実現できた。研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。その結果（回答数 87 名：回収率約 100%）、HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない（8%）、治療されていれば恐れない（77%）で計 85%が恐れ不要と感じており、研修会による啓蒙の効果もあってか比較的前向きに捉えてくれていると考えられた。また自施設への受け入れに関しては、積極的に受け入れる（7%）、薬で安定していれば受け入れる（49%）、不安は強いが受け入れる（31%）など温度差はあるものの、計 87%が受け入れ可能との意見であった。

【2】福祉療養施設への出張研修、意見交換

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を行った。今年度は比較的小規模な病院・施設で行いその結果、計 3 病院・施設への出張にて、計 53 名の参加者に当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義が行えた（図 1）

なお、各出張講義の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。主な内容は、① HIV 感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関して

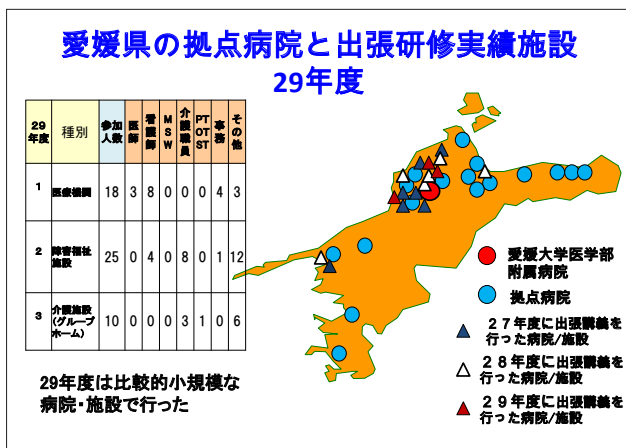


図 1 地域の病院・福祉施設への出張講義（平成 29 年度）

であった。その結果（回答数 53 名：回収率 100%）、① HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない 36%、治療されていれば恐れない 36%で計 72%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的前向きに捉えてくれていると考えられた（図 2）。

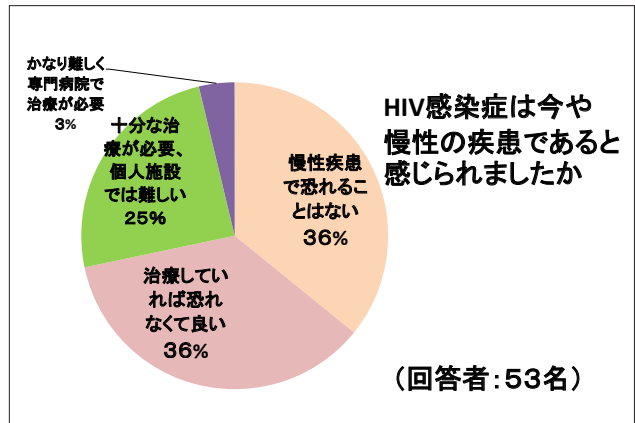


図 2 HIV 感染をどう感じたか、恐れ不要と感じたか

さらに、②各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、83%が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た（図 3）。

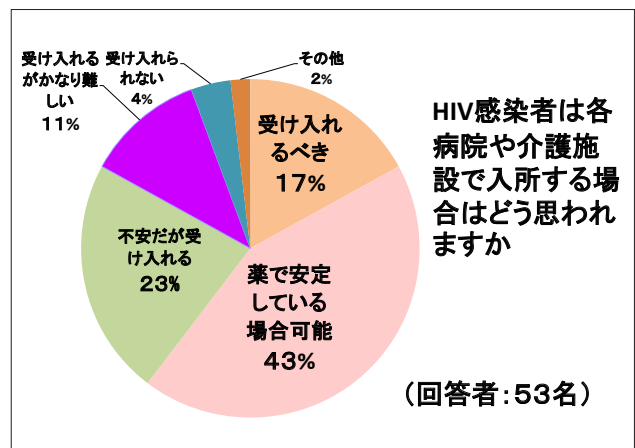


図 3 自病院・施設での HIV 患者の受け入れについて

なお、今年度もこのような出張講義を、実際の患者受け入れも踏まえて行った結果、昨年度同様に自活不能な 1 名の患者の転所・受け入れが円滑に行えた（累計 4 名）。具体的には、クリプトコッカス髄膜炎の後遺症により、比較的意识は清明に戻りつつあるが運動機能障害がみられる症例であり、出張講義とともにその後も当院と密に連携しつつ、（就業も見据えた）社会復帰に向けて療養生活を行い特に大き

な支障もなく過ごしている。

【3】在宅介護職員の実施研修

今年度も、今後 HIV 患者の介護に直接あたってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、計 6 名の在宅介護看護師に各々 1 週間ずつ研修会として、当院の HIV 患者の実施研修と講義・討議を行った。

【4】拠点病院などを対象とした教育講演会、意見交換

HIV 感染者の増加に伴う地域の支援の充実に目的に、保健所職員、拠点病院および多くの立場・職種の有識者（メディア／学校／会社／商業などの立場から選出）と HIV 感染予防対策に関する協議会を平成 29 年 10 月 4 日に松山市保健所にて開催し、HIV 感染に関する現況報告（演者：高田清式）を行い、各自の立場での意見交換を行った。さらに、診療レベルの向上および地域の HIV 診療・福祉の現実を多くの医療関係者に知ってもらう目的で、平成 30 年 2 月 14 日に愛媛県の HIV 診療ネットワーク会議（県全域の拠点病院が参加）を開催し、県内の他病院の HIV 診療状況を検討しあうとともに『愛媛県の HIV 感染対策の現況報告』というテーマで、講義・討論を行った。

また、四国地方での HIV 感染症患者の診療連携を目的に平成 29 年 8 月 8 日、平成 30 年 2 月 4 日に徳島県の保健所や医師会館に向き HIV 感染者の高齢化と福祉の連携について報告・相互討議を行った。

【5】地域で実践的なポケット版小冊子の作製

地方で HIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時の HIV 感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIV に関するポケット子（18x10cm 大）を作製・改訂し県内および四国の主だった HIV 診療施設に配布した。

考 察

地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携として愛媛県をモデルに、地方における HIV 診療および福祉連携に関する啓蒙とともに実態調査を昨年度に継続し行った。全国的に少子高齢化社会にな

りつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後の HIV 感染者の高齢化と福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

当院では平成 29 年末現在累計 170 名以上の HIV 診療経験があり（県内の大半の HIV 診療を担当）、愛媛県の中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV 感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年 10 名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢の HIV 感染者が多く見られ HIV 診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢の HIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成 29 年末現在 50 歳以上の 8 割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計 3 施設の療養型病院・介護施設などへ直接出張講義を HIV 診療チームとして行った。その結果昨年に引き続き今年度も 1 名の介護や福祉環境を要する HIV 患者の受け入れが円滑に行い得たことは、直接に行う出張講義は積極的な連携の 1 方法として意義が高かったと考える。さらに、出張講義の際のアンケートで計 72%は「治療等が良好なら不安はない」（うち 36%は治療に関係なく不安はない）および 83%が「施設として受け入れ可能」との比較的好感な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実に今後円滑に図り得る可能性が高く期待できると考えられた。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良が年々進んでいるものの、今後 HIV 感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われる今後の 1 課題と考えている。

なお、これらの実践的な出張研修は、エイズ学会雑誌に投稿し査読の結果、近々掲載が決まっており、学会報告のみでなく、文書として全国に発信できることも意義深い。

いずれにしても HIV 患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して各地域・病院において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実に図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握す

るための調査研究に努めたいと考える。また、今年度も昨年度に引き続き愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催しHIV感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の約4分の3以上は「治療等が良好なら不安はない」（うち8%は治療に関係なく不安はない）および87%で「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実に今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。さらにより具体化した福祉連携をめざし、今年度も地方で実用的な（愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット冊子を改訂・配布した。今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

また、今年度は徳島県とも福祉連携体制などについて十分討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が1人では送れないHIV感染患者に対し、福祉連携が円滑にできるように努めていく必要があると考える。さらになお、その福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

結 論

HIV診療および福祉連携に関し積極的に出張講義などを行い個々に具体的な問題を整理し知識・経験を共有でき、施設で患者を受け入れ得た（昨年度から累計4名）。高齢化社会を迎え介護・療養が必要なHIV感染・エイズの増加に対応するために、地方での診療・福祉連携の充実是不可欠であり研究を継続しさらに向上に努めたい。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

高田清式：HIV感染症を中心とした性感染症対策～地域におけるエイズ拠点病院の取り組み、日本性感染症学会誌、28(1):35-40,2017

2. Kinai E, Komatsu K, Sakamoto M, Taniguchi H, Nakao A, Igari H, Takada K, et al: Association of age and time of disease with HIV-associated neurocognitive disorders: a Japanese nationwide multicenter study. J Neurovirol 23(6):864-874,2017

2. 学会発表

中尾綾、末盛浩一郎、山之内純、安川正貴、高田清式、HIV陽性者に対するアイオワギャングリング課題。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月

小野恵子、末盛浩一郎、古川泰弘、若松綾、武田玲子、芝田佳香、乗松真大、木村博史、中尾綾、山岡多恵、井門敬子、高田清式、エイズ診療地域連携を目指した研修会～アンケート調査による研修会有用性の検討 第2報～。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月

末盛浩一郎、中尾綾、若松綾、武田玲子、芝田佳香、古川泰弘、小野恵子、乗松真大、木村博史、山岡多恵、井門敬子、高田清式、安川正貴、ART施行により血清RPR・TPHA異常高値と抗カルジオリピン抗体高値が改善した1例。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月

木内英、小松賢亮、坂本麻衣子、谷口俊文、中尾綾、猪狩英俊、渡邊愛祈、高野操、菊池嘉、岡慎一、HIV関連認知機能障害（HAND）と精神疾患や薬物使用との関連（J-HAND研究第3報）。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月

岡崎玲子、蜂谷敦子、湯永博之、渡邊大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南留美、吉田繁、小島洋子、森治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、猪狩英俊、寒川整、石ヶ坪良明、太田康男、山元泰之、古賀道子、林田庸総、岡慎一、松田昌和、重見麗、濱野章子、横幕能行、渡邊珠代、藤井輝久、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、岩谷靖雅、吉村和久、国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし